いまと、これから。

いまとこれからのとっとりのためのボランティア・地域づくり・NPOを考える情報誌

地域おこし協力隊女子目線の

おすゝめの一品。

あなたは、全部わかりますか？

【編集後記】
先日、中学生が地域活性化策を発表する場に同席しました。「ゆるキャラを！」「地元の食材を使ってバーベキュー大会を」等々、提案そのものは荒削りでしたが、彼らが一生懸命考えてプレゼンテーションする姿そのものが「希望」でした。ただ、これが従来の学校の授業や地域参加の枠におさまることなく、現実に地域づくりや課題解決の担い手として彼らが活躍する舞台をつくりだすことが、私たち大人に求められていると思いました。（毛利　葉）

特集

地域おこし協力隊女子目線の

地域づくりのいまと、これから。

一般財団法人　とっとり県民活動活性化センター

いまとこれからのとっとりのためのボランティア・地域づくり・NPOを考える情報誌

「いまと、これから。」　2015年3月31日発行（第3号）

発行：一般財団法人 とっとり県民活動活性化センター

発行人：山根到　　編集人：毛利葉
取材・編集：寺坂純子、椿善裕、谷祐基、尾崎可愛、河上奈名子、藤田純子、森本周子、小原み幸
デザイン：石原逸也　　写真：市川貴美江
表紙モデル：県内地域おこし協力隊女子座談会参加者の皆さま

お問合せ：一般財団法人 とっとり県民活動活性化センター
〒682-0023　倉吉市山根557-1　パープルタウン2階
TEL: 0858-24-6460　FAX: 0858-24-6470
E-mail: info@tottori-katsu.net　URL:http://tottori-katsu.net/

特集

地域おこし協力隊女子目線の

地域づくりのいまと、これから。

今回の目次

＊特集「地域おこし協力隊女子目線のいまとこれから。」
・地域おこし女子デビュー方法チャート。 …2
・地域づくりのいま。 …3
・地域おこし協力隊女子座談会 …5

＊スペシャルインタビュー
「地方創生担当大臣 石破茂さん目線の地域づくりのいまと、これから。」 …9

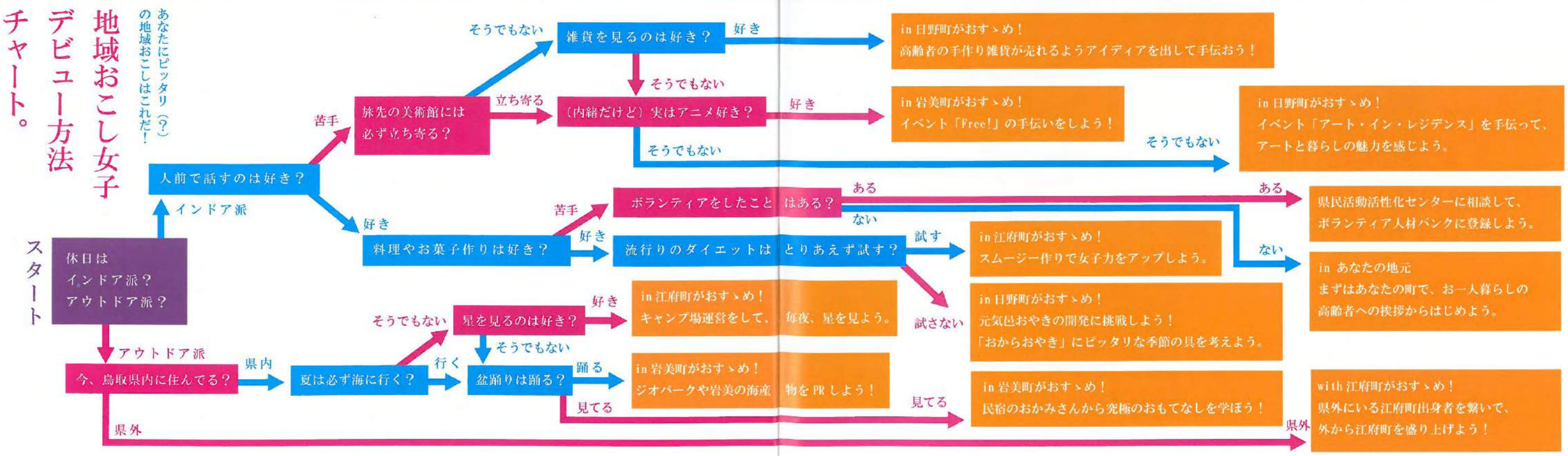
＊センター理事紹介「佐々木千代子理事」 …12

＊高校生 ing「渋谷 大輝さん、生田 宙さん」 …13

＊編集後記 …裏表紙

地域おこし女子デビュー方法チャート。

あなたにピッタリ（？）の地域おこしはこれだ！



地域づくりのいま。

今回のテーマは「地域づくり」の「いまと、これから。」です。

「地方創生」という言葉が、昨年末から地域活動や地方の活性化を語るときの大きなキーワードの一つになっています。

安倍総理が「地方活性化や人口減少対策のため設置する『地方創生本部』（仮称）」の設立を発表したのが平成26年6月14日。「少子高齢化の進展に対応し、人口減少に歯止めをかけ、東京圏への過度の集中を是正し、それぞれの地域で住みよい環境を確保して、将来にわたって活力ある社会を維持すること」を目的に、「まち・ひと・しごと創生本部」が正式に立ち上がったのが平成26年9月。同月、鳥取県もいち早く「地方創生の実現に向けた提言」を石破地方創生担当大臣に提出しています。

それから半年。年末年始をはさみ、鳥取県でも、平井知事が『地方創生元年ロケットスタート！』ということで、年明け早々、県と市町村の情報共有や協議の場として、「鳥取創生チーム」会議を東部・中部・西部で開催しました。

とっとり県民活動活性化センターも、商工団体やJA・森林組合、大等教育機関、金融機関などとともに参加し、平成27年4月からは、県の各振興課と協働で、東部（県庁東部振興課）、中部（とっとり県民活動活性化センター）、西部（県西部総合事務所西部振興課）の3ケ所に「とっとり創生支援センター」を設置し、地方創生の推進に向け、NPO等民間団体の相談や運営支援、行政との協働事業の相談やマッチングの支援を行うことになりました。

地方活性化のための政府の施策は、「日本列島改造」、「ふるさと創生事業」等、これまでもありましたが、今なぜ新たなとりくみが求められているのか、その背景は何か、あらためて考えてみたいと思います。

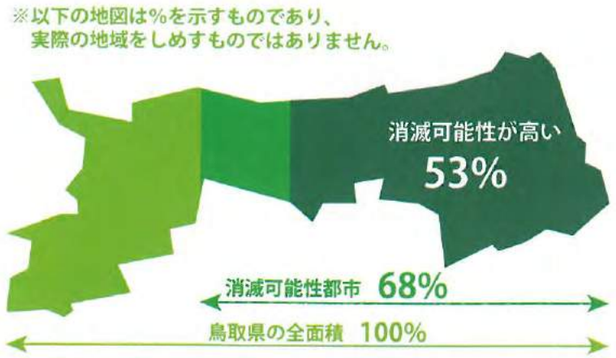
地方創生の大きな目標の一つが、人口減少対策です。きっかけとなったのが、元総務大臣増田寛也氏を中心に作成された「増田レポート」（『中央公論』2013年12月号）で、その後発表された日本創生会議・人口減少問題検討分科会のレポートが大きく話題になりました。そこでは、20～39歳の若年女性の2040年人口を推計し、現状から半減以上する896の自治体が「消滅可能性都市」とされ、さらに2040年に人口1万人未満（推計）523の自治体が「消滅可能性が高い」として示されました。鳥取県も4つの市と1町1村を除く13町（68%）が「消滅可能性都市」に含まれ、10町（53%）が「消滅可能性が高い」自治体と指摘されました。※1

しかし、この推計に将来を委ねることなく、実践で克服していくための議論もはじまっています。

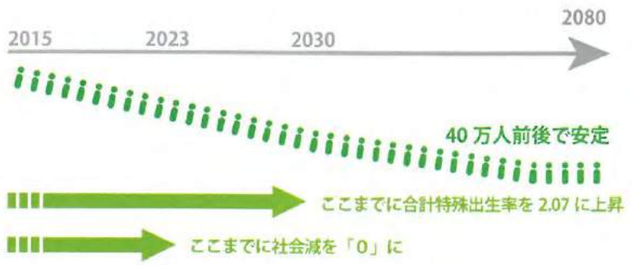
人口減少対策は、①自然増（出生数）を増やす、②自然減（死亡数）を減らす、③社会増（移住・定住）を増やす、④社会減（県外流出）を減らすという4つの対策しかありません。死亡数を減らすことは不可能なので、現実には他の3つの方策を立てることになります。地方で出生数を増やすためには、仕事と家庭と地域コミュニティとの関わりが両立でき、子どもを安心して産み、乳幼児から高校・大学等まで、ゆたかに育つ環境や中長期的な家庭設計ができる基盤が必要です。

また、若者・高齢世代問わず、とくに東日本大震災以降、地方に居を移したい志向は広がりつつありますが、移住・定住者を増やすには、魅力ある地域情報の発信やハード・ソフト両面での受入環境の整備が欠かせません。高校や大学卒業時に、県内に留まったり、戻ってくる若者を増やし、人口流出を防ぐためには、子どもの頃から地域コミュニティへの愛着を育むことやゆたかな地域資源や住民ニーズに基づく起業・雇用創出や様々な資源の地産地消をすすめ、さらに企業のイノベーションを促進し、分厚い地域経済を構築することも必要です。

鳥取県が独自に試算した将来推計人口のシミュレーションでは、①国の目標を10年前倒しして、2030年までに合計特殊出生率を2．07に上昇させ、②10年後（2023年）に社会減をゼロにできれば、将来的にも2080年くらいに40万人前後で安定すると指摘されています。これは、①合計特殊出生率が、2008年から2013年までの5年間で1．43（全国17位）から1．62（全国7位）に上昇した実績や、②2011～2014年の移住者数目標2000人を1年前倒しで達成した実績（2013年までに21



※1 『地方消滅』増田寛也編著（中公新書2014年）



※2 「鳥取県将来推計人口の試算」第2回鳥取創生チーム会議（2015年2月）資料1

※3 「鳥取県の将来人口シミュレーションについて」未来づくり推進局企画課（2015年1月16日）

※4 「鳥取県の地方創生総合戦略に盛り込むべき事業例」第2回鳥取創生チーム会議（2015年2月）資料2

72人）から導きだされています。※2

また、3つの圏域毎にみると、鳥取市が周辺の町の人口を吸収し、全国に流出させている東部に対して、比較的人口流出が抑えられている中部、増加が見込まれる地域もあれば、5割前後まで落ち込むことが見込まれる地域が多様に存在する西部、といったように違いがあり、市町村毎ではその違いはさらに大きくなります。※3

鳥取県では、現在「地方創生総合戦略」の策定がすすめられていますが、平成27年3月に出された骨子（案）では、自然、時間、人・絆に関する指標が全国的なランキングで上位にくることから※4、①大いなる自然の恵みに生きる。②ぬくもりの絆に生きる。③ゆったり刻む時を生きる、いわゆる「自然」「絆」「時」の3つの分野を、他県にはない鳥取県の強み・特性として設定し、議論がすすめられています。

しかし、県や市町村レベルの議論だけでは絵にかいた餅になります。子どもから高齢者まで、移住者も含め、地域のみんなが集まって、地域の現状を共有し、どうしたらいいか議論する、そんな機会を、地域協議会や学区レベルでつくりだしてみる、具体的なプロジェクトや組織を動かしてみる、そんな試みや環境づくりが求められています。

今回の特集は、我が国の地方創生のとりくみを先頭にたってすすめられている地元鳥取県選出の衆議院議員、石破茂地方創生担当大臣のインタビュー、県内で活躍している女性の地域おこし協力隊のみなさんに集まっていただいた座談会で構成してみました。

今、旬の『地域づくり・地方創生』を身近に感じていただければと思います。

地域おこし協力隊女子目線の鳥取のいまと、これから。

「地域づくり」や「地域おこし」。この言葉にピンとくる20代や30代の女性はどのくらいいるでしょうか。「地域」のイメージといえば町内会（自治会）。「この部落の班長は○○さん、婦人部長は○○さん…」という話や「ごみステーション当番」「回覧板」を親世代がしているのを見聞きしているくらいではないでしょうか。

では、「地域おこし協力隊」のイメージはどうでしょうか。例えば、昨年放送していたTVのドラマ。高知県を舞台にした地域おこしを担う若者たちの青春群像劇。あれにに登場したのが実は「地域おこし協力隊」でしたが、どのくらい意識に残ったでしょうか。どちらかというと人間模様にスポットがあたっていたので、なんとなく「地域おこしをしようとする人たちがいる」という認識だったかもしれません。

地域のことは親世代になったら順番で回ってくる役があって、子どもが生まれたら担う役が待っている。地域って、地域おこしって、果たしてそれだけのことなのでしょうか。この鳥取にも、県外から移住してきて、地域を元気にしようと日々、挑戦を重ねている「地域おこし協力隊」の皆さんいます。今回はその中から、鳥取県内の岩美・日野・江府エリアで活動している4人の女性の地域おこし協力隊の皆さんに集まっていただいて座談会を開きました。テーマは、地域おこし協力隊女子目線の「鳥取のいまと、これから。」です。

「もし、あなたのまちに地域おこし協力隊がやってきたら。」

「もし、地元民として迎える側になったら。」

「もし、その地域おこし協力隊が、あなたと同じ年代の女性だったら。」

そんなことを想像しながら、4人の外からでもあり、中からでもある、ちょっと違う目線の「鳥取」のお話をお楽しみください。

はじめに、それぞれどの県から来られて、どの地域に入られているか教えてください。また、全国さまざまな地域で協力隊の募集があったと思いますが、その中から鳥取を選んだ理由を教えてください。

田中 泰子さん　東京都から岩美町に来ました。夫が鳥取出身で、移住先を県内で探していました。岩美の海のきれいさ、人のあたたかさに惹かれて移住を決め、その後に地域おこし協力隊の募集を知りました。東京にも海はありますが、濁っているので、海に入ると足元が見えないんです。岩美の透き通る海に感動しました。

眞崎 愛さん　私は福岡県から日野町に来ました。福岡は都会ですが、県外や国外からの観光客を意識したまちづくりが完成していると感じていたんです。なので、地域おこし協力隊に興味を持ってどの地域に行きたいか探していたときには、そこに住んでいる人たちがそこに暮らしていくために、真剣に地域おこしに取り組んでいる。でもまだやり方や形ができあがっていない、という地域に惹かれました。これからどんどん面白くなっていくような気がして。

清水 祐花さん　もともと鳥取県の米子市出身で、東京に進学していました。野生動物の保護について勉強する中で、その地域の生き物を持続的に守るためには地元の方の理解と協力が必要だと感じていました。なので、その地域と野生動物との間にはいって、人間と動物の共存のお手伝いたしたいと思って、鳥取に戻ることを決めました。その時に、地域おこし協力隊の募集を知って江府町に来たんです。

上谷 美波さん　大学では美術を専攻していました。作品を制作し、人に見てもらっても。それは「作品」対「人」であって、もっと人と人の交流を持ちたいと協力隊への応募を決めました。周りに鳥取出身の友だちもいなく、一度も来たことがなかったので、鳥取の、募集一覧の一番上に掲載されていた江府町に決めました。周囲の反対もありましたが、それが逆にモチベーションになりました。「鳥取に住んで自慢をしてやる！」という。

田中 泰子
出身：東京都
赴任地：岩美町
活動内容：新規民宿経営者の誘致。現存の民宿支援。アニメ活用事業。
おススメの文化：本「I　MY　モコちゃん」

清水 祐花
出身：米子市
赴任地：江府町
活動内容：NPO 法人 奥大山倶楽部の環境教育、冬イベント、キャンプ場管理、クーポン作成など。　おススメの文化：ぬじゃべす（HipHop ジャズ）

取材協力：たくみ割烹店

協力隊の皆さんは、地域から「やってほしい」と言われている基礎の仕事と、それを実行した上で、協力隊の任期が切れる3年後を見越して取り組む自分の「やりたいこと」との2段階の活動に取り組まれていると思います。みなさん、具体的には地域ではどのような活動をされているのですか？

眞崎 愛さん　日野は、高齢化の著しい地域なので、地域を観光地化して人を呼び込もうという方向の前に地域の高齢者の暮らしに寄り添う土着的な仕事が基礎になります。

それで日常的には「高齢者なんでもお助け隊」という畑仕事や生活の困難をお助けしてまわるという仕事をしています。ここで住民と信頼関係をつくっていき、一方で4月からアーティストインレジデンスという暮らしとアートを結びつけて地域をもりあげるようなプロジェクトも始まります。そういったアート系のプロジェクトも始まる流れのなかで、真崎個人的には自分と同世代の若者（大学生くらい）が気軽に日野町に旅しにきて住民と関わるしくみをつくっています。「居候ハウス」という2階建ての自宅に居候してもらいながら、日野に在るあたりまえの暮らしや百姓の知恵を、地元の人に接しながら体感してもらっています。

上谷 美波さん　江府町の隊員は、NPO法人奥大山倶楽部を立ち上げ、現在はNPOの活動が基礎の仕事です。

個々の活動としては、地元の子どもたちに、清水が野生動物のことを教えたり、上谷さんがものづくりを教えたしています。

田中 泰子さん　私は岩美町観光協会に所属していて、民宿経営者の誘致活動が基礎の仕事になります。岩美は海が近く観光客向けの民宿が多くありましたが、担い手がいないため廃業してしまった民宿が多くあり、その活用を考えています。でも、実際に地域に入ってみて民宿がなくて困っているのは宿泊利用者で、住んでいる人は困っていないのでは？と感じることがあります。民宿を辞めても家の人はそこに住んでおられるので、空き家のようになるわけではないんですよね。

また、岩美は人気アニメ「Free!」のロケ地として知られているので、ロケ地めぐりに使える観光マップも作りました。アニメの聖地は作品のターゲット同様に男性であることが多いですが、岩美は女性ファンが多いのが特徴ですね。

女性ファンというと県外から来られる女性だと思うのですが、地域で活動をしていて、同年代の20代～30代の地域の女性と出会うことはありますか？

田中 泰子さん　ほとんどないですね。住んでいるのは見かけるので、いるのだと思いますが、地域の活動に参加となると、若い年代の参加自体が少ないのが現状です。

清水 祐花さん　女性は少ないですよね…。江府は青年団が元気なんです。地元の若い女性もいるにはいますが、イベントに誘うと、「ほかに誰が来るの？」と気にされますね。

田中 泰子さん　そうそう。鳥取の女性は目立ちたくないみたいですよね。でも一緒に活動したいです。若い世代が参加する地域活動といえば「子ども会」がありますが、子どもの数が減って子ども会自体が存続の危機。自分の活動している地域も同様で、子どもが少ないから、他の地域からも子どもを呼んで合同で竹ドーム作りを開催しました。

眞崎 愛さん　日中や地域行事のなかではほとんど会わないですよね。町外からの移住者もいまのところ体力のある男性ばかりなのですが、自分が女性として移住してみて若い女性の力が欲しいなと思うことがけっこうあります。今つくっている豆腐や味噌などの加工品、高齢者の趣味でやっている小物づくりなども若い女性的なセンスが加わればより素敵なものが生まれるのではないかと思います。

最後に実際に住み活動してみての「鳥取」の率直な感想を教えてください。

田中 泰子さん　ないものは多いと思うんですが、不便と感じたことはないです。

眞崎 愛

出身：福岡県・赴任地：日野町
活動内容：高齢者の困りごと、100世帯屋号MAP、季節を発信できる「元気邑おやき」をつくる。　おススメ：昭和の歌に触れてみる。「リンゴの唄」並木路子、倉橋ヨエコ（変な曲です）

上谷 美波

出身：奈良県
赴任地：江府町（全体担当）
活動内容：子どもたちに、ものづくりを教えたり、町の歴史や文化を生かした町おこしをするため、日々、頑張っています。　おススメ：SMAPです！

確かに都会ほどお店があるわけではないけれど、自分が行くお店は結局限られるし。

人が多ければ話す機会も多くなるわけでもないから、人との関わりは鳥取の方がつながりやすい環境だと思いました。

眞崎 愛さん　家の玄関に野菜や食べ物が置いてあることが日常的にあります。たまにはお下がりの作業着なんかも。家に帰ると急に日当りが良くなっていて、なぜかと思ってみると家を覆っていた裏庭の木が、きれいに切りそろえてもらっていたのは驚きました！

日野町での活動の中に、「高齢者お助け隊」というのがあるんですが、地域の方を助けようと（地域に）入っているのに、逆に助けられてばかりいるのが現状です。

清水 祐花さん　田舎の人はもっとまちづくりというものに無関心だと思っていたら、実は、やる気がすごかったです。でもみんなやりたいこと、やりたい気持ちはあるのに、それを胸に秘めて終わっている。やりたいんだけど、方法がわからなくて一歩踏み出せない印象です。やり方を知ったら、動けるようになるのかなと感じています。

やりたいことや思い、元気を秘めているけれど、どう動いたらいいか迷っている。表立って何かをするのがちょっと苦手。鳥取の女性たちにはそんなところがあるのかもしれません。でも、楽しみながら少し手伝うだけでも、それは地域にとって大きな力になります。

みなさんも、地域おこしの皆さんと一緒に楽しみながら地域づくりに関わってみませんか？本誌の2ページに「きっかけ」をみつけるためのフローチャートを掲載しましたので、まずは自分の好きなことから「きっかけ」をみつけてみてください。

本誌の裏表紙に今回の座談会に参加してくださった地域おこし協力隊の皆さんが選んだ地域の「おすすめの一品」を掲載していますので、併せてご覧ください。
※下（↓）に掲載していますのでは、その一品の名前です。

大山おこわ

天然水
奥大山

本格手作り
もめん豆腐

牧谷窯のお皿

地域づくりのいまと、これから。

スペシャルインタビュー

地方創生担当大臣 石破茂さん 目線の

石破さんは地方創生担当大臣を務められていますが、「地方創生」とは、どういうことなのでしょうか？

私が鳥取大学附属小学校・中学校に通っていた頃、鳥取市内は賑やかでした。若桜街道にも智頭街道にも鹿野街道にも、シャッターを下ろしている店はほとんどなかった。連休になれば白兎海岸や砂丘にもたくさんの観光バスが来たし、農山漁村も活気があった。地方の活力を感じた時代でした。鳥取の子ども達は町が発展していくのをワクワクしながら見ていました。中でもハイライトは今の鳥取駅が出来た時。ホテルニューオータニ鳥取も建ち、鳥取大丸もきれいになりました。当時、地方にあのような活力が生まれたのは、公共事業と企業誘致のお蔭でした。インフラが整備され、三洋電機、オムロンなどの企業誘致が雇用を生み、目に見えて地域が発展していった時代でした。

これからも鳥取道等の公共事業や企業誘致にも取り組みますが、これらのみによって過去と同じような形で地域を活性化することはできません。国の借金が膨らみ、道路等のインフラの多くは補修を必要とし、人口が減少をしている中で、新規の公共事業を増やすことは難しく、自動車や家電などの大量生産のための工場を日本国内に置いておくのは、企業としてはもう採算が合わないからです。

しかし、地方の潜在力を活かして活躍して頂きたい産業はたくさんあります。農林漁業、サービス業、中でも医療や介護、そして教育と観光です。これからは、これらの産業の潜在力を最大限に発揮することが必要です。いままでは、東京の企業に頼んで企業誘致を行い、東京を見て仕事をしていましたし、公共事業も東京つまり国から貰ってくるという意識でした。これからは、東京を見るのではなく地元を見て頂きたいと思います。鳥取市や若桜町、南部町…それぞれ、その地域のことは、そこに住む人にしかわかりません。なぜその地域で人口が減っているのか、それは男性なのか、女性なのか、どの年代、どの階層が減っているのか、その本当の原因と対策は、その地域でないと分からないのです。

今回は、それぞれの市町村、都道府県で計画を作っていただきます。計画作りに必要なお金や人材、ビッグデータという情報などを提供し、国は支援しますが、それを受けて、今後どのようにその地域を動かしていくのかという計画は、それぞれの地域で作っていただく。倉吉市なら倉吉市で、なぜ人口が減っているのか、移住者をどうやって増やすのか、増えていく医療費をどこまで合理化できるのか。「そのまち」にふさわしい数値目標、KPI（重要業績評価指標。目標の達成度合いを計る定量的な指標のこと。）を立てていただきたい。それも、ただシンクタンクに丸投げするのではなく、商工会議所、商店街、青年会議所、農協など産業に携わる人、市役所、大学、銀行、連合など労働組合、日本海新聞など新聞、TV、つまり「産官学金労言」の連携で取り組んでほしい。そこでPDCAサイクルを組込み、施策の検証をして次につなげていってほしい。その場所に住んでいる人がいいと思わなければ、いい地域にはならないのです。

そうした流れの中で、NPOなどの地域づくりの活動に取り組む人達はどんな役割を担うとよいでしょうか？

先ほど「産官学金労言」の連携の話をしましたが、行政は何事も公平にしなければいけないとの前提がありますし、企業は営利を離れることはできません。その中で、NPOは行政でも企業でもなく、多くのアクターをつなぐ存在として機能して頂けるはずです。横展開をするためには、いろんなヒト・モノ・コトをネットワーク化して、他の地域の取り組みを伝えたり、地域のキーマンを紹介するなどして、そのネットワークを機能させることが大事です。

そのネットワークを機能させることこそが、中間支援組織の役割だと思います。鳥取でも「とっとり県民活動活性化センター」が立ち上がりました。NPO向けの研修会だけではなく、企業向けのCSRの勉強会等にも取り組んでいます。

例えば、鳥取県鳥取市の鹿野と、広島県の尾道市と、徳島の神山町が連携して空家活用に取り組んでいるというような好事例があります。私はこれまで外交や防衛、農林水産の仕事を主にしてきて、地方創生の担当は去年の9月からですが、「こんな素晴らしい地域があるんだ」という事例を日々発見しています。そのような事例は、以前から地域再生、地方創生に携わっていた専門家の方々は知っておられても、一般的には「はじめて聞いた」という人が圧倒的多数なんですね。例えば、鹿児島県の「行政に頼らない『むら興し』」で有名な鹿屋市柳谷集落「やねだん」。島根県大田市の中村プレイス株式会社も好事例です。そのような事例を「こんな話があるんだ。じゃあ、うちでもできるんじゃないか？」という形で活かしてほしいと思います。

以前から、鉄道による活性化というやり方もあるのではないかと思っていました。例えば、老朽化し廃止した「特急出雲」はもっと使い道があったのではないか。先日テレビの取材で、国会議員ではじめて「ななつ星 in九州」に乗りました。最高級の地元の食材、地元と一体化したサービスなど、鉄道と地域おこし、鉄道と観光の究極の組み合わせはこれだと思いました。他社もこの成功例に倣おうという動きがある。二番煎じ、三番煎じにならないためには、それぞれの独自性が必要です。失敗事例もあれば成功事例もありますが、それらの情報を共有し、ネットワークとして横展開していく存在はとても大事だと思います。

最後に、今回の特集は女性の地域づくり参加がテーマなのですが、特に地域の20～30代の女性にメッセージをお願いします。

この地方創生に政府として正面から取り組むことになったきっかけは、一昨年に雑誌『中央公論』12月号に載った増田寛也さんの「2040年、地方消滅。『極点社会』が到来する。」という記事でした。増田さんとは福田内閣でともに大臣を務めたこともあり、何度かお会いして話もしました。昨年の通常国会冒頭には、私は自民党幹事長として代表質問でこの論文を取り上げました。

この論文の一番のポイントは、2040年、すなわちあと25年経ったら20～30代の女性が若桜で、智頭でこれだけ減りますよ、という数字を明らかにしたことです。一方で20～30代の女性は、今まで政治や行政の意思決定過程に参画することがあまり多くはなかったと思います。しかし、仕事にしても、結婚や子育てにしても、この世代の方々が「住んでいる地域をどんな地域にしたいか」が一番重要なんですね。だから、20～30代女性の発信はこれからますます大事になると思っているし、今後はこの世代の女性の意見を政治や行政がもっと取り入れられるような仕組みも作っていかなければならないと思っています。

地方や国が努力をしたときに、若い女性の皆様にもぜひ応えていただき、「どんなまちにしたい」「どんなむらにしたい」という積極的な意見をいただきたいと思います。

（インタビュアー　毛利葉）

佐々木千代子

SASAKI Chiyoko

NPO法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会　理事長

簡単に活動の経歴を教えてください。

景観を大切にしながらみんなが楽しめるまちづくりを行う、NPO法人いんしゅう鹿野まちづくり協議会（以下、まちづくり協議会）の理事長をしています。

平成9年、日中に鹿野にいる人ということで白羽の矢が立ち、軽い気持ちで鹿野の盆踊りの実行委員長を引き受けることになりました。毎年実行委員長を続け、そこから少しずつ活動を広げていきました。平成12年に任意団体が立ち上がり、同年「鳥取県まちなみ整備コンテスト」で最優秀賞をいただいたことをきっかけに、さらに活動の輪が広がり、平成16年にNPO法人を設立しました。

現在、空き家の活用、フォーラム、学びやアートに関連したプロジェクトなど、さまざまな活動を行っています。

鳥取はどんなところですか。

また、どんなところにしたいですか。

特に最近「鳥取は頑張っている」と思っています。というより、頑張らざるを得ないということでしょうか（笑）。

小さい県だからこそ、お互いの顔が見える関係性を活かすことができ、小回りも利きます。私達は鹿野を「中山間地の星」にするという夢を抱きながら活動しています。活動をされているみなさんも、私と同様、それぞれの想いで頑張っておられます。私は自分達の活動は発展途上で、まだまだ伸びしろがあると思っています。

夢に向かって活動を続けることで、地域が元気になると思います。

とっとり県民活動活性化センターにどのように関わっていきたいですか。

自分も含めた活動メンバーには、いわゆるカリスマ的人物は存在しません。自分も含め、メンバーはいわゆる『ごく普通』の人達で、みんなで一緒にやることでここまで来たと思っています。活動していくなかで、普通の人間の感覚が大切だと感じることが多々あります。そして、活動をされている方々の多くも、自分と同じような感覚を持った方だと思っています。そういった意味で、センターには自分の持っている『普通』の感覚を送りこめればと思います。

とっとり県民活動活性化センターに対する期待を教えてください。

先程の話と重複しますが、団体とその活動を支える方々の多くは、やるべきこと・やりたいことを共有できる人々と集まり、続けています。ひとりではできないことも、みんなで知恵を出し合い、協力して達成していきます。

センタースタッフが団体の方と接していく際には、組織自体というより、そこで頑張っているみなさんをサポートするという気持ちで接してもらいたいです。

また、活動の長い団体は、どこに行けば情報が得られるか、誰に相談すればよいかを知っています。どうしてよいか困っている、特に設立間もない団体の力になれる存在になってほしいです。

倉吉市内にある児童センターでボランティア活動を続けてきた、生田宙さんと渋谷大樹さん。「中学校時代、高校も入学当初はヤンチャしてました」という二人が初めてボランティアに参加したのは、中学校3年生の時でした。

生田さんは、中学校の先生に声を掛けられ、学校の文化祭で発表する人権をテーマにした演劇に参加したことがきっかけで、その後、ボランティア活動に積極的に関わるようになりました。

渋谷さんは、中学3年生の6月から仲間達と「明るく、元気に、ニコニコ」をキーワードに「それいけアンパンマン」というボランティアグループをつくって、ボランティア活動を始めました。そこへ生田さんを誘い地域のお祭りに模擬店を出店したり、東日本大震災の際には募金活動を行いました。また近くにある保育園を訪問して、子ども達と一緒にレクリエーションを行なったりしていました。

「人見知りで、話すのが苦手だった」という渋谷さんもボランティア活動をする中で、「初めての人、初めての場所でもしゃべれるようになって楽しいと思えるほど、人としゃべるのが好きになりました」と活動を通して自身の成長を語ってくれました。

また、将来サッカーの指導者になりたいという生田さんは児童センターでのボランティア以外にも、地元小学校のサッカーチームに指導ボランティアとして参加するようになりました。

二人にボランティアを続けてこられた要因についてきくと、「楽しかったからです。学校でのボランティアと違って、児童センターでは最初にこうして欲しいという最低限の指示がありますが、そのあとは自分達で考えさせて、自由にさせてくれます。だから続けてこられたんだと思います。」と語ってくれました。

児童センターで二人を中学生の頃からみてきた山下先生は、「最初は二人ともいいかげんでした。でもそれが次第に皆を引っ張っていってくれるリーダーになっていってくれたんです」と話してくださいました。

渋谷さんは県外で就職、生田さんは地元に残ってサッカーの指導者を目指しながらも、「今後もボランティア活動を続けていきたい」と語ってくれました。

高校生ing

現在進行形の高校生の動きを紹介する

Vol.03　昔はやんちゃしてました。

倉吉北高等学校
渋谷 大輝 さん
（3年生）

倉吉総合産業高等学校
生田 宙 さん
（2年生）